

三月十五日

安倍千晴

何日ぶりかの湯船に長い間浸かっていた母が

濡れた髪のままニユースを見たとき

黒ひげ危機一髪に負けたような声を一言あげた

前の日の晩まで日が落ちると

こんなときはワクワクするものと

お気に入りの美しいろうそくのコレクションに火をつけていた母は

しばらく前におじいちゃんが入院したとき以来の顔で

今日は外に出てはいけないと言った

それでも母は古いコートをクローゼットから出してきて

力強く傘をさしたのだった

まだ食べものを探しに出ないといけない頃だった

子どもたちはひっそり元気になっていた

ママがダメだってお外で遊べないみうちゃんのこと

急に熊本産になった給食の牛乳も

隣の県から引っ越してきて学校見学に来た子のこと

ふーん……って聞くのがいいんだと知っていた

安全も危険も賛成も反対も

ふーん……って聞くのがえらかった

難しいからいろんな意見があるから誰が悪いかわかるか

先生でも解答書を持っていないことを子どもながら見抜いていた

私が母親だったならあの日傘をさす勇氣はあったか

みうちゃんはどんな気持ちで外を見つめていたか

賛成と反対に揺れる投票日にどんな選択がなされていたか
毎日耳にしたあの測定値の単位はいつから聞かなくなったか
思い出し考えるとき

ふーん……と済ませることはできない
境なくつながっている海と空へ

失われている命と生活へ